

「父親が育児に関与する要因」の歴史からの検討： 江戸時代から明治時代において

藤野 敦子*

要 旨

近年、神経科学等の分野では、父親が赤ん坊と物理的に触れ合うと、脳や体内のホルモンが変化するなど、父親の育児に関する生物学的側面が明らかになってきた。進化生物学などの進化論的視座からは、ヒトの父親は進化のプロセスの中で育児能力を獲得していったと考える。しかし同時に父親が育児に関わるか否かは、社会制度、文化、時代によっても大きく異なり、父親の育児は選択的で条件的であることも指摘されてきた。

現在、父親の育児への関与は、進化論的視座から「育児の動機づけになる社会文化的要因と育児行動を喚起する生物学的要因の両要因が関係し、さらにそれらが相互に複雑に関係し合った結果として決定づけられる」とする「相互作用説」によって説明できるとされている。

本稿では、父親が社会全体で熱心に育児をしていたことで知られる日本の江戸時代や父親が育児から離れていった明治時代に焦点を当て、父親が育児に関与する社会文化的要因を検討する。歴史の考察から得られた社会文化的要因を現在考えられている生物学的要因と照らしながら、「相互作用説」の妥当性を検討する。その上で、現在日本を含む先進諸国で重要な課題となっている父親の育児推進のために必要な視点を示唆する。

キーワード：父親の育児、進化論的視座、遺伝・環境論争、江戸時代、心身一元論

1. はじめに

本稿では、乳幼児ケアを含む子供との直接の関わりを「育児」とするが、近年、先進諸国では出産前後の早い時期からの父親の育児を推進する政策が展開されている。日本でも2022年4月には、出産直後からの父親の育児休業の取得を強く推進するために育児介護休業法が改正された。日本は先進諸国の中でも父親の育児時間が少ない国として知られ、現在、父親の育児への関与は重要な社会課題となっている。

父親が育児に関与するか否かは、社会制度、社会規範、文化、時代によって大きく異なることが指摘されてきた (Hrdy, 2009; Roopnarine & Yildirim, 2019)。一般的には父親の育児は、妊娠、出産を

* 京都産業大学 現代社会学部

する女性に比べると、選択的で条件的であると考えられている。ヒトを含む哺乳類全体を考えた場合も、オスが育児をする種は、南アメリカに生息するヨザルやティティモンキーに代表される5%程度だと言われている (Hrdy, 2009)。

哺乳類であるヒトの父親もこの5%に含まれる育児をする種なのだろうか。それとも、ジョン・ロック (John Locke) が述べたいわゆる「タブラ・ラーサ (Tabula rasa)」の状態、つまり全く白紙の状態から、父親は育児行動を自ら習得しなければならないのだろうか。

どの程度が経験や学習により後天的に習得するものなのか、どの程度が生得的なのかという議論は20世紀に展開した「遺伝か環境か (Nature versus Nurture)」論争としてよく知られている。この論争は、ある事柄が起こることに対し、遺伝などの生物学的要因なのか、環境などの社会文化的要因なのか、いずれなのかを問う議論とも捉えられるが、父親の育児行動は一体どのように考えればよいのだろうか。遺伝か環境か (Nature versus Nurture) 論争の一つの帰結として、Jensen (1969) は、いわゆる遺伝、環境の双方が相互に関連しているとする「相互作用説」を提示したが、実は父親の育児についても、同様に考えられている。

本稿ではまず、父親がなぜ育児に関与するのかについて、現在、進化生物学分野等の進化論的視座からどのように捉えられているのかを述べる。また、神経科学等の分野での父親の育児行動への移行に関する研究成果についても言及する。それらを踏まえ、父親の育児が、生物学的要因と社会文化的要因の相互作用によると考える主に進化論的視座からの「相互作用説」を紹介する。

次に、その「相互作用説」の妥当性を検討するために、日本の父親の育児の関与度が全体的に高かった江戸時代中期以降からそれが失われていく明治時代に注目し、父親が育児に関与していた社会文化的要因や関与しなくなった社会文化的要因を考察する。その上で、歴史の考察から得られた社会文化的要因を現在考えられている生物学的要因と照らし合わせる。その結論から、現在日本を含む先進諸国で重要な課題となっている父親の育児推進のために必要な視点を示唆する。

2. 父親が育児に関与する要因に関する仮説

(1) 父親が育児に関与する生物学的要因

ヒトは他の多くの哺乳類に比べ、育児負担が重だけでなく、育児期間が長い。そのため複数の異年齢の子供達を同時に育児せざるを得ない状況が生じる (Kaplan & Lancaster, 2003)。そこで母親単体で育児を行うことは困難で、他にも育児に関わる誰かが必要だとし、ヒトは共同育児をする種だとされてきた (Hrdy, 2007)。

進化生物学の分野では、ヒトの男性は、進化のプロセスの中で遺伝子保存のための繁殖戦略の利益とコストを考慮した結果、自ら育児に時間を投資することを選択し、その能力を獲得していったと考えられている (Boyette & Gettler, 2019; Geary, 2007; Hrdy, 2007; Kaplan & Lancaster, 2003)。その考えによれば、ヒトの男性が自らと生物学的なつながりのある子孫及びつながりのない子孫のいずれに対しても育児をするようになった進化のプロセスは、次のように要約される。

—ある男性がある女性と生まれた子供のそばに行き、その女性の育児を助ければ、その女性から次の赤ん坊の父親として選ばれる確率が高まる。しかし、この男性が一人の女性のそばにずっといるという選択を取れば、他の配偶機会を喪失するため、一生に残せる子孫の数は減ってしまう。そこで男性は少ない子孫であっても、子孫達が生き残り、繁栄していくように、自ら育児に携わるようになった—

生物種は自らの遺伝子の維持・拡散に関心があることはよく知られており、ヒトも例外ではない。また、哺乳類の中でオスが育児をする種は、育児負担が重く、育児期間が長い場合であることも知られている。ヒトの男性は、育児負担の重い赤ん坊を母親とともに大切に育て、子孫を繁栄させるという質重視の繁殖戦略をとった結果、育児能力を獲得したということである。つまりヒトの父親は育児をする生物種と言えるのだろう。

さらに親が育児行動に移るためには、親子間で愛着形成をすることが重要だと言われてきた。これはジョン・ボウルビィ (John Bowlby) が提唱した「愛着理論」として有名である (Bowlby, 1982[1969])。1970年代半ばには育児行動に移行するために必要な愛着形成は、母子間だけでなく、父子間にも形成されることが示された (Lamb, 1977)。近年になると、神経科学の分野において、父親が赤ん坊と物理的に触れ合う中で父親の脳や体内のホルモンが変化し、父子間の愛着を形成しながら育児行動に移行していくことが明らかになっている (Feldman et al, 2010; Feldman, 2017; Gordon et al, 2010; Mascaro et al, 2014)。

これらの研究によれば、父親が赤ん坊と接触すれば、脳内のドーパミンの分泌が促されるとともに、愛情を深めるホルモンのオキシトシンレベルが上昇し、闘争心などに関連するホルモンのテストステロンレベルが低下することが報告されている。妊娠、出産を経験する女性の場合には、妊娠・出産期にオキシトシンやドーパミンが大量に分泌され、それが母子間の愛着形成を促すとされる。妊娠、出産を経験しない男性であっても、子供と触れ合うことで脳や体内ホルモンの変化を経て赤ん坊と愛着形成をするプロセスが見いだされたわけである。

要するに、父親の育児行動は、生物学的現象だということになる。このような父親の育児行動が遺伝子による影響なのかどうかについては、一卵性双生児による調査で明らかにされた研究があるものの、現時点で完全に解明されたわけではない (Machin, 2018:133)。しかし父親にも母親同様に育児行動に移行する身体変化があることは、進化のプロセスで育児能力を獲得してきた結果と言える可能性は高い。父親の子供への身体的な接触がきっかけとなる身体変化やその後引き起こる父子間の愛着形成は、父親に備わっている育児能力を喚起する生物学的要因と考えられるだろう。

(2)父親が育児をする決定要因に関する仮説と検討の方法

ヒトの父親が育児をする種だとしても、実際に育児に関わるか否かは、社会制度、社会規範、文化、時代によって大きく異なるのも事実である。中央アフリカのアカ族は母親以上に父親が育児に関与す

るのに対し、インドでは母親の方が父親以上に育児に関与している (Roopnarine & Yildirim, 2019:65)。日本においては、江戸時代の中期以降には、あらゆる階層において父親が熱心に育児に関与していたことが歴史学者達によって明らかにされている (小山 2002；中江 2003；太田 2017；小泉 2020)。しかし、明治時代の近代化の進展とともに父親の育児への関与は弱まる。現在でも欧米諸国に比べ、日本の父親の育児時間は少なく問題視されているわけである。

現在、父親が育児に関わるか否かは、主に進化論的視座からは「父親に育児を動機づける様々な社会文化的要因と進化プロセスで獲得されたとされる育児能力を喚起する様々な生物学的要因が相互に作用し、またそれぞれの要因内においても、複雑に関連し合い、決定づけられていく」と考えられている (Lewis & Lamb, 2007；Roopnarine & Yildirim, 2019)。いわゆる「相互作用説」である。

この考えによれば、社会制度、社会規範など社会文化的な様々な要因によって、父親が育児に動機づけられた結果として父親が赤ん坊に物理的に接するならば、脳やホルモンなどの身体変化が生じて生物学的に備わっている育児能力が喚起され、その後育児行動をするようになるということであろう。つまり、まずは社会文化的要因により父親の育児が動機づけられることが重要になる。もちろん多様な要因間の複雑な相互作用で父親の育児に対する関与が強められたり、弱められたりすることも考えられる。例えば、同じ環境でも、ミクロレベルではホルモンの分泌の個人差によって育児行動の差が生じるのかもしれない。一卵性双生児の父親においても個人の置かれた環境の差によって育児行動の差が出てくるのだろう。

ところでこの仮説をマクロレベルで見たときに、父親が総じて育児行動をしている社会では、社会の中に父親に育児をするような動機づけとしての社会文化的要因が存在し、またそれら社会文化的要因が育児行動の必要条件となる父親の育児能力を喚起する生物学的要因につなげているはずである。

そこで、本稿では、この仮説の妥当性を検討するために、日本の歴史を考察する。つまり、歴史的な事実から父親の育児関与の要因を抽出する試みである (Lawrence, 1984)。日本の江戸時代の中期以降、父親が熱心に育児に関与していたことは多くの歴史学者によって研究され、知られた事実である。その後の明治時代中期ごろには、父親の育児の関与は失われ、育児が母親にシフトしていく。そこで、その江戸時代から明治時代に注目し、父親が育児に関与する社会文化的要因や関与しなくなった社会文化的要因を考察する。また父親が育児に関与する社会文化的要因は育児への動機づけとなり、生物学的に備わっている育児能力を喚起することになっていたのか、現在の知見と照らし合わせて検討する。

3. 父親の育児に関与する社会文化的要因

これまでの歴史学者達の指摘及び、欧米諸国との比較から、江戸時代中期以降、明治初期に至るまで、父親が熱心に育児に関与していた主たる社会文化的要因として、家制度やメディアのような「制度や文化」及び母性原理、心身一元論などの「思想」が指摘できる。まずは制度や文化について、次に思想について述べよう。

(1)制度や文化

歴史学者達の指摘にもある通り、江戸時代の中期以降、父親達が熱心に育児に関わっていたのは、どの階級も「家」の維持と継承という大きな役目を負っていたからだと考えられる。江戸時代の「家」は、「世代を超えて永続し、直系親族により単独相続され、家の業や家の財産が維持され、構造的に直系家族世帯を形成するもの」と定義されている (Ariga 1954:362)。つまり、江戸時代の人々にとって「家」は、職業、財産をも含む公的な存在であり、先祖から子孫へと永続的に引き継いでいくものであった。

江戸時代は、武士階級であった徳川家康が1603年に天皇から将軍に任命されたことにより始まり、15代将軍の徳川慶喜が1867年に天皇に奉還するまでの264年間を指す。この時代は徳川家が将軍を世襲するとともに武士、農民、商工者に分かれる身分社会として特徴づけられる。また将軍からなる江戸幕府と将軍から領地を与えられた高位の武士である「大名」が主従関係にあり、各大名が自らの領地の農民等を支配する封建体制の時代である。

江戸時代は平和な時代として知られるが、その前の戦国時代では、武士達が兄弟間においてさえも領地の相続をめぐる争うような不安定な時代であった。初代将軍の徳川家康は社会の安定のため、前述したような厳しい封建体制を敷くとともに、武士階級に対し、儒教の中の朱子学を官学とし、その思想により相続を長男一子に限定した。その結果、社会秩序がもたらされると同時に、武士階級にとっては、「家」を維持すること、子孫に「家」を継承することが重要な関心事となる。つまり、父親自らが、継承者づくりとしての育児に熱心に関与することになったのである。その後、庶民階級にも継承者づくりとしての父親の育児が広まっていく。その理由は、主に二つ挙げられる。

一つは「家」が庶民階級にも普及していった点である。

江戸時代の中期以降、すなわち18世紀後半から19世紀初頭にかけては、自然災害による飢饉の頻発がある (Kalland & Pedersen, 1984:55)。この危機を乗り越えるため、庶民階級は傍系親族が多数いる大規模な家族から、経済効率である小規模な農業・商業経営体としての直系家族へと移行していった (平井 2016)。実際、江戸時代の17世紀頃の人口はおよそ1700万人、18世紀頃は3129万人、19世紀頃に3069万人と推測されている (斎藤・高島 2017:63)。つまり17世紀から18世紀半ばにかけて、人口は増加していたが、18世紀から19世紀、つまり江戸時代の中期以降には人口は停滞している。このように、庶民階級においても武士階級と同様の直系家族が一般的となる。そこで、庶民階級も武士階級同様に、少数の子孫を大切に残し、「家」をいかに維持し、継承していくかが関心事になっていった¹。

また一つは、育児書が広範に普及していった点である。²江戸時代の育児書に関しては現存するものだけでも60以上とされるが (Kojima, 1986:318)、探せば無数にあるとも言われている (小泉 2020:357)。庶民階級の父親の育児ニーズが育児書の出版の後押しすることになったと考えられるが、また同時に育児書を通して武士階級だけでなく庶民階級の父親に広範に育児が広がっていったと考えられる。

育児書の出版の増加は、人々の識字率の上昇と関係している。武士は当然ながら100%、読み書きができた。朱子学が官学であったためそれを学ぶことが必須だったからである。庶民階級についてはどうなのか。江戸時代末期頃の識字率を当時の私設教育機関であった「寺子屋」の数などから推計したアメリカ人研究者によれば、各年齢層の男性の40～50%、女性の15%程度に読み書きができた(Dore, 2010 [1965]; Dore, 1976)。また同じ頃の都市部の男性の識字率は60%、女性は40%程度にも上っていた(Tsujimoto, 2000: 44)。識字率は身分や地域並びに性別によって違いがあったが、庶民階級の男性の識字率の上昇とともに、庶民階級の男性に育児書が読まれるようになっていったと考えられる。

さらに武士階級から庶民階級の男性に育児が普及していったと考えられる興味深いエピソードがある。初代将軍、家康の子育ての失敗である。家康は長男を自身の後継者にできず、切腹させてしまった。後継ぎになった三男の秀忠には自分の子育ての失敗を繰り返させてはならないと考え、自分が子育てから学んだ教訓を家訓として、秀忠の妻や従者に送る。家康の家訓が後に儒学者達に取り上げられ、育児書に書かれるようになる³。それが江戸時代のあらゆる階級の父親達に読まれるようになり、父親達の育児の指針になったのである(中江 2003:15-31)。

武士階級の家の長は、江戸時代以前より、家の存続のために子孫に対し家訓を書く慣習があった⁴。この家訓の中に、乳幼児期のしつけから、教育に至るまでの注意事項が取り込まれたものが育児書の始まりだと言われている(太田 2017: 197)。つまり、武士階級の家訓が、庶民階級を含め、他者にも読まれるようになったのが育児書というわけである。

このような背景から、江戸時代の育児書は家の後継者づくりの責任者たる父親を対象に書かれたものが多い⁵。しかし同時に仮名文字によって女性を対象に書かれたものも存在している。父親向けに書かれたものには男子の育児法が、母親向けに書かれたものには妻としての務めや女子の育児法が語られる傾向にあった(小泉 2020: 155-162)。つまり父親は息子の、母親は娘の育児に特に携わっていたと考えられる。江戸時代の「家」を重視する社会においては男子が「家」を継ぐ、あるいは新たな「家」を創設するため、男子に対する育児は極めて重要だったが、女子においても、他家に嫁ぎ、夫の役割を助けることになるために必要な育児法があると考えられていた(Fuess, 1977: 384)。

ともかく武士階級から始まった父親の育児が、時間とともに庶民階級にまで広がり、結果としてありとあらゆる父親達が育児に励むようになっていたと考えられる。

(2)思想

次に、思想的な要因について検討しよう。江戸時代に支配的な思想は何だったのだろうか。初代将軍の家康は朱子学を官学としたため、儒教思想が広まっていたことに疑いはない⁶。しかし同時に、日本ではいつの時代にも、母性原理が基底にあることが、多くの学者達に指摘されてきた。元来父性的な宗教であった仏教も日本では、母性原理に基づいたものに変容していったとされる(釋 1993: 697)。江戸時代の「家」についても、政治的、社会的には儒教の影響を受け、父から一人の息子に

継承される父系的な制度が構築されていたが、母性原理を持つ仏教によって補完されつつ機能していた（平山 2002：134）。

心理学者河合隼雄によれば、父性原理は「切斷する原理」であるのに対し、母性原理は「包括する原理」である（河合，1997）。これに基づけば、江戸時代の乳幼児期の父子の一体的な関係性は、自己と他者を一体とする母性原理の影響を受けた父親の姿と考えられる。また、儒教では、男女の役割が明確に区別されていたものの、父親も母親同様に乳幼児の世話行うことは、同様に母性原理が働いていたためだと考えられる。

このような母性原理とともに、儒教や禅宗などの影響を受けた日本独自の「心身一元的身体観」も父親が育児に関わる要因に挙げられるだろう。哲学者市川浩によれば日本人にとって、身体は「身体を超えた錯綜体（implexe 仏語）」、自然的、精神的、自己的、社会的な存在であり、多様なものが統合されたものである（市川，1993）。日本古来の言葉には、物質的な身体を示す Body とは似て非なる「身」という言葉があるが、彼はこの日本語の用法の多義性からそれが推測できるとする。「身体（body）」という言葉が欧米諸国から入ってくるまでの日本では、心身を不可分のものとする思想が主流であったと言える。この心身一元的身体観は、そもそもは武士のエートスとして知られているものである（Demarco, 2015）。このような日本人独特の身体観から、父親は言葉もしゃべらない子供に対しても、身体を用いた関わり方、すなわちケアとしての育児をしたのではないかということである。

これら日本の父親が育児に関与する思想的要因は、父性原理が強く、また心身二元的な身体観が支配的であった欧米社会と対比するとわかりやすい。欧米社会では育児はもっぱら女性の役割で、男性は乳幼児期を過ぎた後の教育を担うと考える傾向が強かった。つまり、男女の役割は明確に区別され、「女性」は子供の「身体」のケアをするのに対し、「男性」は「心（精神）」を養うということである。哲学者イヴァン・イリイチ（Ivan Illich）は、15世紀の文法書の序文に「女性は言葉の話さない幼児に食物を与え育てるが、男性はそれをしない。男性は、言葉を話す子供に教え、導くのだ」との主旨が述べられていることを指摘する（Illich, 1981=2006:113）。精神医学者ジークムント・フロイト（Sigmund Freud）の影響を強く受けた精神医学者ジャック・ラカン（Jacques Lacan）は、父親は、胎児期、乳幼児期に、癒着してきた母親と子供の関係を断ち切る存在であり、子供を社会化させる役割を持つとする（Izovich, 2006）。

江戸時代の育児書の多くは父親に乳幼児からの関わり的重要性を説いている。この事実から、江戸時代は、歴史家フィリップ・アリエス（Philippe Ariès）の述べた「子供期の発見」に対し、「乳幼児期の発見」の時代とも言われている（太田 2017：202）。自己と他者を一体とする母性原理や身体も心も混然一体とする心身一元論がどのように男性の育児に結びついていたのか、具体的に考察してみたいと思う。

まずは、父系的な家を築いている武士階級の男性達が女性達と同様にケアを中心とする育児に深く関わり、子供と親密な関係性を築いていたことがわかる『桑名日記』、『柏崎日記』を見ていこう⁷。『桑

名日記』の著者は渡邊平太夫という桑名（現在の三重県）の下級武士である。一方の『柏崎日記』の著者は平太夫の養子である勝之助である。勝之助は柏崎（現在の新潟県）に転勤を命じられる。そこで勝之助は二歳の長男を平太夫夫婦の家に残し、妻と産まれたての娘の三人で柏崎にて生活を始める。勝之助はその後さらに子供を持つことになる。そのような事情から、平太夫、勝之助はそれぞれ、自分達の育児や家族の状況を知らせ合うために、毎日の出来事を日記に克明に書く⁸。飛脚に日記を託し、二人は九年間、日記を介して情報交換するのである。

この日記から、平太夫と勝之助の子供に対する接し方が具体的にわかる。例えば、平太夫、勝之助ともに夜、赤ん坊を裸にして抱いて寝ていたことである。「赤ん坊を裸にして抱くとよく眠る」との記載が両方の日記にある。また「赤ん坊を抱いて寝ていると、赤ん坊がおしっここの時に泣いて起きる」との具体的な気づきも記載されている。

二人が赤ん坊の時から子どもを頻繁に便所に連れて行き、排せつをさせていることもよくわかる。少し大きくなれば、添い寝をし、眠る前に色々な話をしたり、読み聞かせをやったりしている。歯磨きなどの生活習慣は、教えてはいないが、自分のすることを子供が見よう見まねで自然に身につけたとしている。また、子供をおんぶや抱っこをして外に連れていき、さらに成長すると外で色々な遊びを一緒にした様子も書かれている。もちろん家の中で子供達に読み書きも教えている。

つまり男性達が、女性達と同じように、または共同しながら排せつ、入浴、食事、寝かしつけ、看病などのケア全般に関わっている様子が日記からわかるのである。さらに、母（祖母）と子との関係と同じく、父（祖父）と子との関係もうまく築かれ、子供が目を追って成長している様子も日記の随所から伝わってくる。

次に、心身一元的な身体観が父親の乳幼児ケアを促していたことがわかる育児書の具体的な箇所を見ていこう。武士階級の男性向けに書かれた育児書である山鹿素行の『山鹿語類』には、次のような記載がある⁹。

一生まれたばかりの赤ん坊は小さく弱いものだが、年月を経て初めて、元気のよい、気力の盛んなものになる。それは草木が初めて地上に芽を出した時と同じだ。この時、急いで土を耕したり肥料をやったりしても、急に育つものではない。……だがしかしこの間の養育に教えを含まなければ、養育の道になっただけとはいえない。人の情はまだ何も言わずわきまえない赤ん坊の時から発しているのだから、養育にあたる者がこの情をうまく導いて養育することが、道に従った養育である一

山鹿素行は、赤ん坊を草木の芽にたとえている。このように赤ん坊を草木にたとえるのは他の育児書にも多くみられる。人間もまた自然の中の一つの存在だという感覚が社会にあったことが反映されているのだろう。そして、赤ん坊はまだ自然にある草木の芽のような身体状態だが、それでも養育者は働きかけて赤ん坊の「人の情」を育てるべきとする。身体的なケアが必要とされる赤ん坊の段階で、

赤ん坊の「心」に注目している点は、まさに心身一元的な身体観によるものと思われる。そしてその段階から、男性が育児に関わるべきだとしているのである。

育児書において、「乳母」の選定法や「胎教」の奨励からも、心身一元論的な身体観を見ることが出来る。当時の育児書の多くには、乳母の選定に対して、その人物の気質や品行を見極めることの重要性が説かれている。貝原益軒が1710年に著した『和俗童子訓』には、乳母の条件が次のように書かれている¹⁰。

一心が穏やかで邪（よこしま）なところがなく慎み深くて、おしゃべりでない者がよい。悪賢くて口がうまく、偽りをいったり、ひがみ根性の者はよくない。また、気が強く、自分の思うままに振る舞うほか、酒を好んで酩酊する者もよくない—

これは医師である香月牛山が1703年に書いた『小児必用養育草』でも同様である。乳母の選定のポイントは、乳母の健康状態や体質だけではない。人格にまで及んでいる。乳母の心のありようが、乳母の身体を通して、子供の心身の成長に影響すると考えられているのである。

また多くの育児書では、母親の胎教の重要性が説かれている。女性向けに中村惕斎が1661年に著した『比売鑑』には、次のような記載がある¹¹。

一子を教えるには胎教を先とすべきである。子供が胎内にある時より、あなたには教える道があるのである—

胎教は、妊娠時の健康に対する注意事項というよりは、生後の子育てに連続性する教育思想であり、生後始まる子育ての重要性を強調するためのものと考えられていた（中江1983：15）。胎教で強調されたのは乳母の選定と同じく、母親の心のありようであった（小泉2020：45）。

このように、乳母の人格や妊婦の心が彼女たちの身体を通して、赤ん坊の心身に影響を与えると考えられていたことは、心身を不可分とする「心身一元的身体観」が基底をなしていたためなのだろう。

さらに、育児書の多くでは、親に言葉ではなく、自らが正しく振る舞い、それを子供が自然と見習えるようにする教育法（「徳教」）が強調されている。中江藤樹は『翁問答』で次のように述べている¹²。

一今の人は口で言って聞かせることを教えと思っているので、幼い時の教えというものはないと考えているが、本当の教えとは、自らの行いによって自然と人を変化させることであり、これを徳教という—

このように言葉よりもむしろ身体を用いた育児が重要視されていたわけである。父親の振る舞いを

子供が自然と学び、それが子供の心身に同期されること、それこそが「家」の継承者づくりの真意であったように思える。つまり、育児・教育は、全人的なものであった。もちろん、早い時期からの身体的なコミュニケーションが重要視されていた理由に、職業を世襲的に継ぐ「家」のシステムがあったことも深く関係していたと考えられる。言葉にできない知やスキルの伝達はできる限り早期に始めるのがよいと考えたのだろう。母性原理が基底をなす社会の中で、心身一元的な身体観からくる乳幼児ケアこそが、「家」の責任者たる父親の継承者づくりの第一歩だったのである。

4. 父親が育児から離れていく社会文化的要因

明治時代が始まると、欧米諸国の思想が次々に導入され、近代化が始まる。明治時代の中期以降には、父親が育児に関与しなくなっていく。その要因は何だったのかを考察しよう。

これまで述べてきたように、江戸時代の男性が育児に深く関わってきた要因に、「家」の維持、継承がある。江戸時代の終わりには、「家」の維持と継承への関心は長男の単独相続を軸とする「家」の広まりとともに、武士階級だけではなく、どの階級にも浸透していた。そこで、1898年に、明治政府は、「家」の長たる父親の地位と権限を法によって定め、長男の単独相続を軸とする「家」を制度化する。いわゆる家父長的な家制度である。さらに、家の頂点に天皇を位置づけ、国民を統合することで近代国家を目指そうとした。

明治時代には江戸時代に普及していた「家」を制度として確立したにもかかわらず、なぜ父親は育児に関与しなくなったのだろうか。主に二つの要因を挙げることができる。

一つ目の要因は、身分制度の崩壊と学校教育制度の創設である。

明治政府は1871年に身分制度を廃止する。近代化により封建的な身分制度が崩壊し、人々は自由に職業を選択できるようになった。身分制度の廃止に続き、1872年に学校教育制度が整備される。性別に関係なく6歳以上の子供が、全国一律に教育が受けられるようになった¹³。

江戸時代における「家」の継承は父子の職業の継承を含んでいたが、身分制度の崩壊は、父親が子どもに身体を持って教える機会を失うことを意味する。また、近代の学校教育では、言葉で伝えられない知やスキルではなく、近代的な知が教えられるようになる。学校への準備段階においても父親が支援する必然性はない。江戸時代に一般化した「家」が明治時代に制度化されたものの、「家」における父子間のつながりが希薄になってしまうのである。

二つ目の要因は「良妻賢母」イデオロギーや育児を女性の天職とするイデオロギーの形成である。これらのイデオロギーにより育児や学校教育を補完するいわゆる家庭教育は女性の役割や責任に位置づけられていく。もちろん、男性に経済力や軍事力を高める役割や責任が割り当てられる性別役割分業の広がりがその背景にあったことは言うまでもない。

すなわち、「良妻賢母」イデオロギーとは、男は外、女は内という性別役割分業に立脚し、女に第一義的に妻と母としての役割果たすことを求める価値規範のことである（Koyama, 1994:46）。このイデオロギーの形成のきっかけは、明治の初め頃、欧米諸国の思想の影響を受けた当時の啓蒙家達の中

から、新しい国家の女性像は良妻賢母であるべきだとの言説が広まっていったことである (Takó, 2021)。そのような当時の風潮を受け、1902年に菊池文部大臣は、女子を「良妻賢母」にすることこそが女子教育の目的とした。

「良妻賢母」のうち、「賢母」という言葉づかいには、江戸時代には男性の責任であった育児や教育を女性が代わりに責任を負うという含意がある。女性はその役割を担うにはこれまでより賢くならねばならないため、女性には学問が必要だというわけである (Niwa, 1993:72)。その後、育児や教育は、国家の生殖のコントロールの下、女性の「天職」に結びつけられていく (木下, 1982)。天職に結び付けられていく理由は、次のように要約できるだろう。

—女性が「良妻賢母」となることは、家によく仕えるためであり、国家に対しては、家を通じた間接的な貢献にすぎない。しかし、明治政府が対外膨張政策を推進する中、女性に兵隊となる人材の創出と育成という国家の責務を直接、負わせる必要性がでてきた。そこで出生や子育てを「天職」とするイデオロギーが必要になる。「良妻賢母」イデオロギーとの関係からは、「良妻」は夫に対しての態度であり、それを女性の「天職」と主張することは難しいが、出生や子育てに対しては、女性の「天職」と主張しやすかった—

「天職」とは江戸時代の儒教的な思想によるものである (Sekiguchi, 2010:97)。儒教では、各人には身分によって人知を超えた「天」から命ぜられる天職があると考えられてきた。この考え方は、江戸時代の身分社会の思想的基盤となっていたものであるが、近代国家の成立とともに国家のイデオロギーの中に取り込まれていく。このようにして、明治時代の中期以降の育児書は、男性ではなく、女性を対象に書かれていくようになる (金子 1986:362)。

育児を女性役割に位置づける経緯は、18世紀後半から19世紀にかけての欧米諸国の状況に似ている。つまり資本主義体制の発展や家父長制の成立を背景とした家族イデオロギーの広まりにより、女性と男性の役割が切り分けられていった点である (Shoter 1775 = 1987)。さらに国家の生殖コントロールの下、女性が労働力や軍事力の再生産の役割に位置づけられていった点も同様である。このような育児の女性役割への位置づけは、欧米諸国の特徴である父性原理に影響されたと言ってもよいかもしれない。

しかし、日本には欧米諸国と異なる特徴がある。欧米諸国では、女性は男性よりも自然に近い存在と考えられ、女性は自然の行為としての出生や育児を負うものとされた。他方、男性は、知的で文化的な活動を負うものとされた (Ortner, 1972:12)。欧米諸国での自然と文化の二分法は心身二元論に影響されたものであるが (Oliver, 2000:3)、自然・文化および精神と身体は補完的な関係にある。そこで、女性が家庭において育児を負うが同時に、男性も家庭において子供の教育の責任を負ったのである。

儒教思想がそもそも定着していた日本では、家に関すること、つまり家事、家計管理に加え、育児

も家庭教育も女性の「天職」すなわち、公的な務めにされたのである。これにより、女性は私的領域で行うことに対して、公的領域に位置付けられた男性と同等の責任を負うことになった。公的領域、私的領域と領域は異なるが、責任の男女平等性は、欧米社会の民主的な思想の影響と同時に日本社会の基底に働いていた母性原理も関連していた可能性がある。いずれにせよ、そういった思想に影響を受けた日本の家制度においては、日本の女性は家庭に対し強い権限と責任を持ち、家庭と家庭の外で明確に男女の領域が分離することになったと考えられる。このような明治期の家制度を源とする社会規範や制度等が日本社会では長期にわたり影響力を持ち、現在の父親の育児関与の低さにもつながっていると考えられる。

5. おわりに

日本の歴史的な考察から、父親が育児に関与する、また関与しない社会文化的要因が見えてきた。まずは江戸時代になぜ父親が育児に関与していたのか、その社会文化的な要因として四つ挙げたい。

一つ目は、武士階級から始まり庶民階級にも普及した「家」という社会システムである。社会秩序や社会の安定を重視していた江戸時代においては、父親は家の継続のため、こぞって将来の自らの子孫の繁栄を願い、少ない子供に対し、自ら質の高い育児をすることが動機づけられていたと考えられる。

二つ目は、「育児書」というメディアによる父親の育児法の広範な普及である。育児書を通して、当時の父親は、他者の育児経験の効果を知ったり、育児法を学んだりすることができた。また育児書の普及により、男性もしくは父親が育児することが社会規範になっていったとも考えられる。

三つ目は、日本の思想基底にあり、性別役割を曖昧にする「母性原理」である。当時の家の父系的なシステムや朱子学の教えは父性原理の要素を持っていたが、日本の場合、基底をなす母性原理により、男女の性役割が曖昧になったり、子が赤ん坊のうちから父子が密接な関係を築いたりすることにつながったと思われる。

四つ目は、「心身一元論的な身体観」である。この思想は出生前後の早い段階から子供に物理的に関わる教育法に具現化され、育児書などを通して父親が赤ん坊の頃から熱心に乳幼児ケアを行うことを動機づけたと考えられる。もちろん、家業とも密接に関係していた「家」というシステムの中で、父親が赤ん坊の時から子供に全人的に関わることで、「家」の継承がうまくいくと考えられていたことも影響しているだろう。

これらの要因はそれぞれ独立して父親の育児を動機づけているわけではなく、複合的なものとして父親の育児への強い動機づけになっていたと考えられる。前述した四つの社会文化的要因においても「家」のシステム、育児書の普及、基底にある思想は相互に関係し合っていることは見てきた通りである。また明治時代でも、類似の「家」自体は存在していたし、日本ではいつの時代でも「母性原理」が働いていると言われてきたが、社会文化的な要因の変化が複雑に重なり合い、江戸時代では見られた父親の育児への関与が明治時代では、見られなくなっていくのである。

次に父親が関与しなくなる要因について述べたい。

親が育児に関与しなくなる社会文化的要因としては、性別役割分業を生み出し、生殖をコントロールすることになった近代の制度やイデオロギーが挙げられる。近代化の進展とともに、国家にとっては労働力、軍事力のための人づくりが重要になる。そのために制度化された「家制度」において、子供を持ち育てることは、国家の発展や繁栄のためであり、自分自身の子孫を残すためという動機づけは希薄化してしまう。

また、「良妻賢母」イデオロギーや「育児天職」イデオロギーによって、妊娠、出産を担う女性が私的領域に位置づけられ育児の担い手になると同時に、男性は働き手として公的領域に位置づけられ、子供の経済的扶養役割に専念するようになる。日本では、育児に連続する子供の家庭教育も女性の役割として位置づけられたため、男女の領域の分離が際立つことになり、父親が育児から長い間離れることになったと考えられる。ヒトの父親は哺乳類の中でも育児をする種だとしても、社会文化的要因の変容で父親が子供と身体的に接触する機会がなくなってしまえば、容易に育児に関与しなくなると言えるのかもしれない。

要するに、江戸時代では、社会文化的要因が複合的に作用し、結果としてジェンダー役割の区別がなく男性も育児の担い手となる「共同育児」の環境、安定した社会の中で、将来の子孫の繁栄に思いを馳せ、質の高い「育児投資」を父親自らが選択する環境、出生前後の早い段階から父親が子供に「物理的に接触すること」を動機づける環境が成り立っていたと言える。特に父親が乳幼児と物理的な接触を動機づける環境では、父親の育児能力を喚起する身体変化や父子間の愛着形成も生じていたと考えられ、うまく育児行動へ移行していたことも想像できる。

共同育児をする環境、質の高い育児投資を父親が選択する環境は、進化生物学分野で言われているヒトの父親が育児能力を獲得してきた状況と一致している。逆に言えば、江戸時代はヒトの父親に獲得された育児能力を発現できる環境が整えられた時代と言えるのかもしれない。明治時代になり、父親が純粋に自らの子孫の繁栄を願う平穏な状況でなくなるとともに、実際に赤ん坊の身体に密接に関わる機会が奪われ、育児能力を発現できなくなったのだろう。

この様な点から、父親の育児関与は「父親に育児を動機づける様々な社会文化的要因と進化プロセスで獲得されたとされる育児能力を喚起する生物学的要因が相互に作用し、またそれぞれの要因内においても、複雑に関連し合い、決定づけられている」とする「相互作用説」は妥当している可能性が示唆される。

つまり、江戸時代は社会文化的要因がまさに動機づけとなって、ヒトの育児能力を喚起する生物学的要因を引き出し、育児行動をもたらしていた。また時代環境によって、父親の育児行動が大きく変わっているところからも社会文化的要因と生物学的要因が相互に作用している結果だと捉えられるだろう。さらに、武士階級から始まった育児が江戸時代中期以降、広範にあらゆる父親に広がっていったのも、社会の中での育児経験の共有や子供への育児行動の継承など、多様な要因が複雑にまた社会文化的要因と生物学的要因がダイナミックに関係し合い、良循環を生んだ結果とも考えられるのである。

る。

現在、父親の育児促進は様々な国において重要な課題となっている。本稿の歴史的検討から、父親の育児促進には、社会制度等によって父親の育児能力を喚起する環境を創設することが必要な視点であることが示唆される。父親の育児能力を喚起する環境を考える上で、父親の育児能力が存分に発現されたと考えられる江戸時代の社会文化的要因はヒントになる。つまり、例えば育児休業制度等によって出産直後に父子の「身体における密接な関わり」を動機づけることは、父親の育児促進のためにはなくてはならないことと言えるのではないだろうか。

また、ジェンダーの役割の偏見をなくし、共同育児ができる環境を整備することも重要である。日本に関して言えば、元来、母性原理の中でジェンダー二元性は強く見られず、共同育児がさかんに行われていたことも思い起こすべきであろう。日本では、明治期の家父長的な家制度の創設と近代化の進展により、男性・女性の領域が欧米社会よりも強く分離された社会となってしまった。明治期の家制度に端を発し、今なお社会に残存する思想・制度を問い直しつつ、ジェンダー役割の偏見をなくしていくことが共同育児の復活のためには重要である。

さらに、父親達が次世代の育成やウェルビーイングに思いを馳せる動機づけやそれに対し、自らの時間を投資できる環境の整備も重要だと言えるだろう。つまり父親達が、子供の経済的扶養のために仕事に拘束され、育児に時間をかけられないような環境からの解放は不可欠である。国家や組織から個人がより自由になり、個々の自律性や多様性が受け入れられる社会への転換が必要だということになるだろう。

注

- 1 家の継承は長男であったが、長男以外の男子は、分家（分岐した「家」）を創設し、長男の家と同族の集団を形成した。分家は長男の家からの庇護を受けた（Ariga, 1954, 364）。
- 2 江戸時代の文化を根底から支えたものに「印刷」がある。17世紀半ばより、印刷技術の発展があり、出版物の点数が飛躍的に増加する（入口 2019）。
- 3 儒教では対人関係に関する重要な道徳の一つとして父子関係を挙げていたことが、儒学者に執筆者が多い理由でもある。
- 4 武士の家訓は13世紀から書き継がれてきたが、本来は自らの人生観を子孫に伝えようとするものであった（太田 2017 : 197）。
- 5 父親以外にも上位の武士階級の子供の養育係（男性）に対しても書かれていたと考えられる。ただし、山鹿素行の『山鹿語類』には「子供に乳母、守役、師などを選んで、父母の行跡が正しくなければ無意味である・・・ましてや乳母や守役などをつけられない家庭では、父母はいっそう身を慎んで子供の模範になるべきである」と書かれており、養育係がいたとしても、父親の育児は重要視されていたと思われる。
- 6 家康は儒教の中でも朱子学を官学としたが、18世紀になると、儒教の中でも官学ではなかった「陽明学」を信奉する学者も増えていく。
- 7 1839年から始まる。森他編（1971）の501-765ページに二つの日記の原文が掲載されている。
- 8 勝之助はさらに柏崎で次女、次男を持つ。

- 9 『山鹿語類』の文面は、中江（2003）の67ページから引用。
- 10 『和俗童子訓』の文面は、中江（2007）の32-33ページから引用。
- 11 『比売鑑』の文面は、中江（1983）の15ページから引用。
- 12 『翁問答』の文面は、中江（2003）の45ページから引用。小泉（2020）の256ページにも詳しい。
- 13 その後も教育制度の整備は続き、義務教育期間が4年に設定されたり、その期間が6年と長くなったりと改革が進んだ。

引用文献

- Ariga, K. (1954) The family in Japan. *Marriage and Family Living*, 16 (4), 362-368.
- Boyette, A. H., & Gettler, L. T. (2019) Evolution and human fatherhood. In L.M.M.Welling & T.K. Shackelford (Eds.), *The Oxford handbook of evolutionary psychology and behavioral endocrinology*, 179-199, Oxford University Press.
- Bowlby, J. (1982) Attachment and loss, Vol.1:Attachment (Second edition, First edition was published in 1969) New York, Basic Books.
- DeMarco, M. (2015) *Medieval warrior cultures of Europe and Japan: Body, mind, sword*. Via Media Publishing.
- Dore, R. (1976) *The diploma disease. Education, qualification and development*. London: George Allen & Unwin.
- Dore, R. (2010) *Education in Tokugawa Japan*. Routledge. (First edition was published in 1965) Feldman, R., Gordon, I., Schneiderman, I., Weisman, O., & Zagoory-Sharon, O. (2010) Natural variations in maternal and paternal care are associated with systematic changes in oxytocin following parent-infant contact. *Psychoneuroendocrinology*, 35 (8), 1133-1141.
- Feldman, R. (2017) The neurobiology of human attachments. *Trends in cognitive sciences*, 21 (2), 80-99.
- Fuess, H. (1997) A Golden age of fatherhood? Parent-child relations in Japanese historiography. *Monumenta Nipponica*, 52 (3), 381-397.
- Jensen, A. R. (1969) How much can we boost IQ and scholastic achievement? *Harvard Educational Review*, 39 (1), 1-123.
- Geary, D. C. (2007) Evolution of fatherhood. In C. A. Salmon & T. K. Shackelford (Eds.), *Family relationships: An evolutionary perspective*, 115-144, Oxford University Press.
- Gordon, I., Zagoory-Sharon, O., Leckman, J. F., & Feldman, R. (2010) Prolactin, oxytocin, and the development of paternal behavior across the first six months of fatherhood. *Hormones and Behavior*, 58 (3), 513-518.
- Hrdy, S.B. (2007) Evolutionary context of human development: The Cooperative Breeding Model. *Family Relationships: An Evolutionary Perspective*, 39-68.
- Hrdy, S.B. (2009) *Mothers and Others: The evolutionary origins of mutual understanding*. Harvard University Press.
- Illich, I. (1981) *Shadow work*. Marion Boyars Publishers. (=2006 玉野井芳郎・栗原彬訳『シャドウワーク：生活のあり方を問う』岩波書店)
- Izcochic, L. (2006) Du Nom-du-Père au père qui nomme. *Champ lacanien*, 1, 23-31.
- Kalland, A., & Pedersen, J. (1984) Famine and population in Fukuoka domain during the Tokugawa period. *Journal of Japanese Studies*, 10 (1), 31-72.
- Kaplan, H. S., & Lancaster, J. B. (2003) An evolutionary and ecological analysis of human fertility, mating patterns, and parental investment. *Offspring: Human Fertility Behavior in Biodemographic Perspective*, 1, 170-223.
- Kojima, H. (1986) Japanese concepts of child development from the mid-17th to mid-19th century. *International*

- Journal of Behavioral Development*, 9 (3), 315-329.
- Koyama, S. (1994) The "good wife and wise mother" Ideology in post—World War I Japan. *US-Japan Women's Journal. English Supplement*, 7, 31-52.
- Lamb, M. E. (1977) Father-infant and mother-infant interaction in the first year of life. *Child development*, 48, 167-181.
- Lawrence, B. S. (1984) Historical perspective: Using the past to study the present. *Academy of Management Review*, 9 (2), 307-312.
- Lewis, C, & Lamb, M. E, (2007) *Understanding fatherhood*, Joseph Rowntree Foundation. United Kingdom. Retrieved March 14, 2023, from <https://policycommons.net/artifacts/1799362/understanding-fatherhood/2531006/CID:20.500.12592/x14wgd>.
- Mascaro, J. S., Hackett, P. D., & Rilling, J. K. (2014) Differential neural responses to child and sexual stimuli in human fathers and non-fathers and their hormonal correlates. *Psychoneuroendocrinology*, 46, 153-163.
- Machin, A. (2018) *The life of dad: the making of a modern father*. Simon and Schuster.
- Niwa, A. (1993) The formation of the myth of motherhood in Japan. *U.S.-Japan Women's Journal. English Supplement*, 4, 70-82.
- Oliver, K. (2000) Conflicted Love. *Hypatia*, 15 (3), 1-18.
- Ortner, S. B. (1972) Is female to male as nature is to culture? *Feminist Studies*, 1 (2), 5-31.
- Roopnarine, J. L., & Yildirim, E. D. (2019) *Fathering in cultural contexts: Developmental and clinical issues*. Routledge.
- Sekiguchi, S. (2010) Confucian morals and the making of a "Good wife and wise mother": From "Between husband and wife there is distinction" to "As husbands and wives be harmonious." *Social Science Japan Journal*, 13 (1), 95-113.
- Shorter, E. (1975) *The making of the modern family*, New York: Basic Books. (=1987 田中俊広他訳『近代家族の形成』昭和堂)
- Takó, F. (2021) Education and "civilization": Westernization through centralization and the concept of women's education in late 19th Century Japan. *Távol-keleti Tanulmányok*, 13 (1), 255-268.
- Tsujimoto, M. (2000) Maturing of a literate society-literacy and education in the Edo period (17th-19th century), *Journal of Japanese Trade and Industry*, March/April, 45-48.
- 市川 浩 (1993) 『〈身〉の構造 身体論を超えて』講談社学術文庫
- 入口敦志. (2019) 「江戸時代の養生書出版とその普及」『日本健康学会誌』85 (1), 14-17.
- 太田 素子 (2017) 『江戸の親子 - 父親が子どもを育てた時代』吉川弘文館
- 金子省子 (1986) 「授乳論にあらわれた母親観の変遷」『愛媛大学教育学部紀要 第I部, 教育科学』32, 361-378.
- 河合隼雄 (1997) 『母性社会 日本の病理』中央公論新社
- 小山静子 (2002) 『子どもたちの近代—学校教育と家庭教育』吉川弘文館
- 木下比呂美 (1982) 「明治期における育児天職論と女子教育」『教育学研究』, 49 (3), 255-264.
- 小泉吉永 (2020) 『心教を以って尚為す—江戸に学ぶ「人間教育」の知恵』敬文舎
- 釋徹宗 (1993) 「真宗信心における心理構造の研究 (1)」『印度學佛教學研究』, 41 (2), 696-700.
- 斎藤修・高島正憲 (2017) 「人口と都市化, 移動と就業」中林真幸他編『岩波講座 日本経済の歴史 近世 16世紀後半から19世紀前半』61-104, 岩波書店
- 中江和恵 (1983) 「胎教思想の歴史的検討」『教育学研究』, 50 (4), 343-352.
- 中江和恵 (2003) 『江戸の子育て』文芸春秋

中江克己（2007）『江戸の躰と子育て』祥伝社

平井晶子（2016）「近世後期における家の確立：東北農村と西南海村の事例」加藤彰彦他編『家族研究の最前線

① 家と共同性』日本経済評論社 93-113.

平山朝治（2002）「母性社会論の脱構築」国際日本文化研究センター『日本研究』24, 125-145.

森銚三・鈴木棠三・朝倉治彦編（1971）『日本庶民生活史料集成 第15巻 都市風俗』三一書房

A Historical examination of determinants of father's involvement in childcare: From the Edo period to the Meiji period

Atsuko FUJINO

Abstract

Currently, the evolutionary perspective states that fathers' commitment to childcare is affected by the continual interaction between biological and sociocultural factors. Biological factors provoking paternal behavior interact with sociocultural factors motivating fathers toward involvement in childcare, producing complex interactions between and among factors over time.

This article discusses the sociocultural factors that gave rise to the father's behavior as a caregiver, from Japan's Edo to Meiji periods. We focus on the social institution, thoughts, and ideologies peculiar to these ages in Japan. Moreover, we discuss the relationship between the sociocultural factors identified historically and the biological factors assumed by current research in the evolutionary biology. Ultimately, we consider whether the findings obtained from the historical perspective support the current assumption.

Keywords : Fathers' childcare, the evolutionary perspective, Nature versus Nurture, Edo period, Body-Mind unity